

卒業論文をつくろう

－ 中学3年生の実践 －

大江 和彦

「緊張します…」ある生徒は、この授業が始まる最初の時間で私に言った。また、ある生徒は、この授業の最後のまとめである発表にのぞみ、同じことばを私に言った。

では、なぜ生徒は緊張するのだろうか。どちらの生徒も、この「卒業論文をつくろう」という授業で、果たしてきちんと最後までやりとげることができるのかという不安、自分が積み上げてきた研究をみんなに理解してもらえるかどうか、という不安が、冒頭のことばを言わせたと思われる。わずか半年の研究、わずか10分間の発表を前にして生徒が発することばは、いかに主体的にものごとに取り組む姿勢を持ちつづけ、豊富な表現力で自分の考えを他者に伝えることが生徒にとって大きな壁となっているかを物語っているともいえる。生徒一人一人の興味・関心を生かしながら、これらの姿勢や能力を育成するために行った実践を考察し、報告する。

1. 実践の大目標

近い将来（高校生）の自己の理解・認識の成長を客観的に確認し、よりよい社会の成員としての自分に何が必要かを考えるため、現在の自己を、分析・理解・表現する。

「卒業論文をつくろう」という目標に対し、自己の課題の発見、情報化社会における情報収集・情報分析、発表を前提とした批判的内容精選・内容構成・表現方法の工夫を通じて、自らの意見を論理的かつ効果的に発信できる態度と能力を育成する。

2. 学習指導計画

	月	学習のねらい	単 元 名	学習の具体的な内容
I 学 期	4	・同じ分野に興味を持つ生徒が共同で研究できるグループを作る	1. テーマの選択	・自分が興味を持つ研究を、アンケートを通じて客観化する
	5	・研究の目的・内容・方法を確認する	2. 論文作成 I	・研究への具体的アプローチを、グループごとに構想する ・論文のレトリックを学び、グループに欠けている視点を補い、方法を修正する ・情報収集源の探索や内容構成の方法を再構成する
	6	・研究の目的・内容・方法を具体化する	3. 論文作成 II	・情報収集、内容精選、内容整理、表現方法の工夫を通じて説得力のある論文構成の準備を行う
夏 休 み	7	・執筆作業 1		・研究目的を確認しながら執筆作業を行い、論文の完成を目指す
		・執筆作業 2		・研究目的を確認しながら執筆作業を行い、論文の完成を目指す
II 学 期	8			
	9	・研究内容を効果的に発表する ・討論を通じて視野や視点を改善する	4. 発表と討論	・論文の発表を通じて研究の意義や内容に関する共通理解を得る ・批判的討論を通じて、よりよい内容にできるよう相互に高めあう

3. 単元別学習目標と内容

(1) 単元名 「テーマの選択(1)」

(a) 前提と予備調査…課題の把握と目標設定
まず、

①3年LIFE社会科の時間は、2クラスに分かれて1年間を週1時間で実施し、2クラスとも、2人の教官が異なるテーマで、1年間を前期と後期に分け、学習すること。

②一斉授業の形式をとらず、生徒一人一人が自分で課題を設定し、自らの力で解決してゆく学習形態であること

を確認した。次に、現在の生徒が持つ課題を把握し、これからのLIFEの学習にどう生かせるかを考察するため、アンケートを実施した。(以下の○数字はアンケートの項目)

①生徒自身が疑問や関心を持っている社会的事象は何か。

②①を、どのような経緯で興味を持つに至ったか、

③これまで学習してきた(これから学習する)社会科の科目(分野)を、どのような興味・関心を持って学習してきた(学習してゆきたい)か

④なぜそのような興味・関心を抱くに至ったか。

⑤・⑥ 社会的事象に関する情報源として、最も有力であると考えられる新聞の内容に、日常的にどの程度触れているか

⑦～⑩ 社会事象に対して、どのような興味・関心を持っているのか

(未来への指向性(問題解決の意識)はどの程度あるか)

⑪自分が興味を持って、継続的に研究できるテーマは何か

を客観化し、かつ十分な説得力をもって自らの意志として表現できうるかという視点から構成し、50分の授業時間の範囲内で書かせ、提出させた。

(b) 学習の実際

A…アンケート(略)

(c) まとめと課題

アンケートを集計した結果、次の3点が明らかとなった。

①現在の社会に存在するさまざまな社会事象に関する正確な認識がほとんどできていないこと

②未来志向的思考(現在の社会の諸問題を解決してゆこうという考え)が、極端に弱いこと

③自らの意志を強く持てない精神的未熟さ、または表現しきれない技術的未熟さがあること

これらの認識の上で、生徒が自分自身の力で問題を発

見し、考え、解決してゆくための、いわゆる「生きる力」を獲得させるために必要な実践として、つぎのような、「卒業論文をつくらう」というテーマを設定し、生徒に説明した。基本的方針は、以下の通りである。

<卒業論文をつくらう>

◎中学校1・2年生で学習した歴史・地理、3年生で学習する公民的分野、さらに他教科で学んだ学習方法と知識を生かし、現在の自分の興味と関心を主題として、写真や絵・文章を中心とした論理的な内容を作成し、発表する。

◎2人～4人のグループを作り、各グループが同一テーマで研究する。論文としての形式にはこだわらないが、目的・方法・内容を明確にして、他者を論理的に説得できるものにする。

◎建設的な意見を文章とことばで効果的に表現し、研究の成果を他者に伝え、理解を得る。

(2) 単元名 「テーマの選択(2)」

(a) 学習の目標と内容

「テーマの選択(1)」において明らかとなった課題を克服するため、「卒業論文を作ろう」というテーマを設定し、生徒一人一人が、興味・関心を生かして自由に研究テーマを設定できるよう、包括的3大テーマとして、

1. 現代日本の社会問題を考える、

2. 現代世界の諸問題を考える、

3. 歴史上の人物に生き方を学ぶ

の3分野を設定した。

この中から1つの課題を自ら選択し、生徒自身の力で問題解決に関する建設的意見を記述する方向で研究を行わせる。ただし、課題の選定に関しては、興味を持って最後まで取り組めるよう、できるだけ現在の自分の生活や考え方に関係の深いものを選べるように適宜指導した。

1は、現在学習している公民的分野との関連で、現代の社会的事象をどう解釈し、将来の私たちの生活にどう生かすことができるか、

2は、1年次に学習した地理的分野の知識を生かし、地球的規模で展開される諸問題をどう解釈し、将来の地球上の国家や民族がどうあるべきか、

3は、2年次に学習した歴史的分野の知識を生かし、過去のさまざまな時代のさまざまな人物の生き方や思想に学び、私たちの将来の生き方にどう生かすか、を考えさせるための指針となるよう配慮した。

(b) 学習の実際

個人的な研究テーマを一人一人に設定させ、やみくもに情報を収集し、独り善がりな研究にならないよう、ク

ループを作ることを前提に、B（略）のアンケートを実施した。

○これからの予定 についての補足説明

短い期間で発表しなければならないため、計画的な情報収集と執筆が必要となること。授業以外の時間も利用して研究しなければならないこと。

○テーマの中の課題 についての補足説明

自分が本当に研究したいと思えるもの、意義ある研究となる可能性の高いものを、自分の言葉で書かせる

○目的・方法・内容の決定 についての補足説明

発表までの期間を、夏休みをはさんで、いかに有意義に使わねばならないか、を考えてもらうため、また、選択したテーマを継続的に研究しつづける意志の確認として、また、テーマに対する想像力を豊かにするため、目的（なぜこの課題を選んだのか）・方法（どうやってこの課題を研究してゆくのか）・内容（どのような内容でこの課題に対する意見をまとめるのか）の3点について、現在の自分自身の認識の範囲内で、記述させた。

（c）まとめと課題

残念ながら、この段階では、自分自身の課題の設定ができない、課題が設定できても、課題に対する認識が低いため、現在の生徒の知識・技能では、目的や方法などを客観的に文字にできないなどという大きな問題があった。しかし、1人ではなく、2人以上のグループの中で互いに意見を出し合い、助け合いながら研究を進める過程の中で、新たな意見や方針が生まれることを期待しつつ、次の時間の反応を見ることにした。

(3) 単元名 「論文作成Ⅰ」

（a）学習の目標と内容

グループ分けをした時点から論文作成に入る。2人～3人構成の13グループをつくり、教室内で、具体的な研究内容の検討に入る。それぞれの生徒が考えてきたテーマや内容を、いかに統合し、具体化するのかを考えさせた。グループ名の決定とともに、論文作成のスタートとして、重要な時間である。

（b）学習の実際

プリントC（集計結果（略））により、グループに分かれさせ、班長を決め、グループ名を決めさせる（Dのプリント（略）を提出させる）。グループ名を決めるといことは、複数の生徒が一つの研究テーマに向けて進みはじめるということにもなる。

<C…グループ分けと目的・方法・内容>

テーマと内容の一覧は、次の通りである。

A 現代日本の諸問題を考える

A-1 「日本を変えようの会」

…日本経済の変化とその要因を考える

目的…自分たちが将来困らないように

方法…TV番組で経済特集を見る、インターネットを使う、本・新聞など、役所で資料をもらう

内容…好景気や不景気の原因・世界大恐慌の要因とその立ち直りについて など

A-2 「砂漠に降る雨」

…地域振興券は、慈雨の雨となりうるか

目的…地域振興券の偽造防止や得する使い方を通じて景気の回復について考える

方法…振興券をよく観察する、インターネットで調べる、新聞を読む

内容…振興券ができるまでの過程・景気の変動など

A-3 「日本と米軍」

…日本とアメリカの関係のあり方を考える

目的…日本の将来に関わる問題を、自分たちの手で研究してみたい

方法…図書を主に利用する

内容…文章と図を入れて視覚にも訴えたい

A-4 「じれったい自衛隊」

…軍隊と国家について考える

目的…ガイドライン法が問われる今、何らかの指針を示したい

方法…図書館の資料、インターネット

内容…自衛隊とは何か・自衛隊は違憲か・これからの自衛隊は？

A-5 「流行でGO2」

…日本の流行を考える

目的…日本の人間は、どんなことに関心を持っているのだろうか

方法…図書館や本屋へ行って、最近の流行についての本をむ。テレビを見る

内容…プロ野球や歌手・若者のファッションなどの流行

A-6 「バック・トリ・ザ・フューチャー～過去へ未来へ～」

…日本の流行を考える

目的…流行が社会に与える影響を考える

方法…雑誌、テレビ、インターネットなど

内容…だんご3兄弟とサスペンス物のドラマ

B 現代世界の諸問題を考える

B-1 「民族紛争」…世界の民族紛争を考える

目的…人々を不幸にする戦争は、無くならないのか

方法…図書館、図書室、テレビ、インターネット、新聞など

内容…現在と過去の民族紛争は、なぜ起こるのか（起

こったのか)

B-2 「紛争組」…世界の民族紛争を考える

目的…戦争の悲惨さを後世に伝える

方法…マスメディア

内容…世界から見たNATO軍とユーゴの国内情勢

C 歴史上の人物に生き方を学ぶ

C-1 「三国志(前半期)」

目的…正史と小説における劉備玄徳の差を研究する

方法…図書館

内容…黄巾の乱・官渡の戦い・赤壁の戦いから三国建立まで

C-2 「三国志(後半期)」

目的…歴史の移り変わりを人物を中心に研究する

方法…図書館で本を探す

内容…三国時代から晋の統一まで

C-3 「後世に最も多大な影響を与えた戦いを知る」

目的…歴史の中の大きなできごとである関ヶ原の戦いを深く調べ、歴史への関心を高める

方法…図書室で本を、インターネットなど

内容…関ヶ原の合戦でなぜ東軍が勝利したのか、合戦は後世にどのような影響を与えたのか

C-4 「某M大学歴史研究部」

目的…歴史に対する理解を深める

方法…本、インターネット、図書館など

内容…上杉謙信と宇喜多秀家の人生

C-5 「戦国大名の女性について」

目的…戦国時代の女性の権利、男女の差を知る

方法…図書室などで本を調べる

内容…戦国時代以前と以後の女性の権利や立場

(c) まとめと課題

以上の一覧にある通り、ユニークなグループ名が提出されたが、冗談半分に考えている生徒もおり、生徒の資質によっては、授業の中の話合いの時間が、班名を決めるためだけに費やされたりして、時間の浪費が目立つこともあった。

(3) 単元名 「論文作成Ⅱ」

(a) 学習の目標と内容

- ・各班の班名とテーマに即した内容構成を考える
- ・情報収集のための手段を考える

(b) 学習の実際

ここから、各班は、資料集めに入る。しかし、各班の構想を具体化することが先決であると考え、E(略)の用紙を配布し、各班で、3章ないしは4章にわたる全体

構成を考えさせた。各章の小テーマは、疑問形にすると考えやすく、その疑問に答える形での各章の内容構成を立案させた。かなり具体的な章立てを考えている班もあったが、依然として、班内の意見の一致が見られず、先に進めない班もあった。このような生徒には、班のテーマに即して、最低限、何と何を考えなければならぬかを示し、具体的な章立てと資料収集の例を示した。(はじめに…第1章…第2章…第3章…おわりに など)

資料収集にあたって、図書館とコンピュータ教室を開放し、自由に情報収集できるよう便宜を図ったが、コンピュータ教室のコンピュータを利用して、インターネットで検索をかけ、情報を集める班が多かった。

(C) まとめと課題

研究の目的意識がはっきりしないために、むやみに本を読む生徒、インターネットのホームページは、特定の思想に偏る傾向があると注意したにもかかわらず、公平さを欠く情報を鵜呑みにする生徒が多いことなどは、情報化社会においてどのように情報を取捨選択するかという、現代社会における重要な問題を十分に考慮できていない証明でもあった。このような生徒に対する指導は、重要であると考えられる。

(4) 単元名 「発表と討論」

(a) 学習の目標と内容

原稿提出、印刷、配布、発表、討論を通じて、各班の研究成果を他の生徒に問い、よりよい研究としてゆく過程である。

(b) 学習の実際

9月はじめを提出期限としていたが、未完成の班が多く、締切日を大幅に繰り下げたため、当初予定していたカリキュラムを大幅に短縮さざるを得なくなった。印刷された各班の論文を持ち帰って読んでくることになった。上、予定していた発表時間を短縮し、討論の時間を削減することになった。各班には、10分間の発表時間と、質問を受け付ける時間を与えたが、他の班の論文を十分に読んでいなかったためか、質問も殆ど出なかった。ただし、各班の発表に対する評価の観点を次のように定め、生徒による評価を点数化した。

内容について

あ 文体はわかりやすかったか(1~5点)

い もくじは適切か(1~5点)

う 内容はわかりやすかったか(1~5点)

表現について

え 論文の文字はわかりやすかったか(1~5点)

お レイアウトはよかったか(1~5点)

発表について

- か 説明の仕方はわかりやすかったか (1~5点)
- 総合評価
- き 総合的な完成度はどうだったか (2~10点)

各生徒は、配布された評価用紙に、各項目の点数と班の発表に対する一言コメントを記入し、回収した後集計した。次に掲載するのは、点数が最も高かった班(男子2名)の「じれったい自衛隊」という論文である。

もくじ 1 はじめに 2 自衛隊とは 3 日米同盟はアジアの基礎 4 周辺事態が起こったら
5 これが周辺事態! 6 世論の反応は? 7 まとめ

1. はじめに

今年5月24日、国会で周辺事態法・改正自衛隊法・改定日米物品役務相互提供協定(ACSA)からなる新しい日米防衛協力のための指針関連法(以下ガイドライン関連法)が成立した。このガイドライン関連法は、1997年に日米両国が発表した「新ガイドライン」に基づき、米軍がアジア太平洋地域に影響力を保ち、日本がそれを支援する関係を築くことで地域紛争を抑止することをねらっているものである。しかし、この関連法には、様々な問題があり、曖昧な定義が多いのも事実だ。ここでは、これらの問題点を検証していきたい。

2. 自衛隊とは

自衛隊とは、直接及び間接の侵略を未然に防止し、万一侵略が行われるときは、これを排除し、もって民主主義を基調とするわが国の独立と平和を守るためにある。昭和32年に閣議決定された国防の基本方針の第4条には、「外部からの侵略に対しては、将来国際連合が有効にこれを阻止する機能を果たし得るに至るまでは、米国との安全保障体制を基調としてこれに対処する。」とあるつまり、この「米国との安全保障体制」が変われば、自衛隊の働きも変わるのである。そして、それは変わった。

3. 日米同盟はアジアの基礎

1997年9月、日本とアメリカは新しい「日米防衛協力のための指針(ガイドライン)」に合意した。ガイドラインとは、日本がアメリカとの間で結んでいる、「日米安全保障条約」(以下安保条約)に基づいて、実際に戦争が起きたとき、自衛隊と米軍がどのような活動をするのか、あらかじめ方針を決めておく文書だ。

旧ガイドラインがつくられた78年当時は、「東西冷戦」の真ただ中で、安保条約に基づく日米の同盟関係も、ソ連を封じ込めることを目的としており、当時は日本が武力による攻撃を受けた場合にどう協力するかということが中心だった。しかし、冷戦が終結し、ソ連が解体され、日米の同盟関係は今のような意味を持つのか考え直し、「再定義」する必要が出てきた。

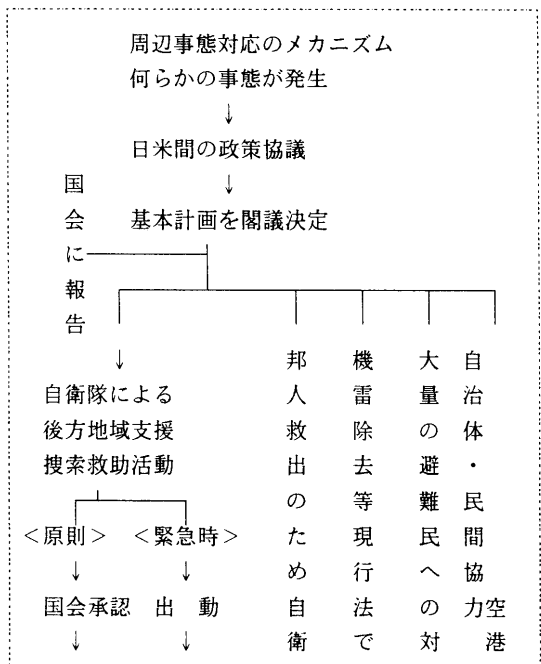
1996年、当時の橋本首相とクリントン大統領は「日米安全保障宣言」に署名し、日米同盟関係は、「アジア太平洋地域の安定の基礎」と新たに位置づけた。つまり、米軍が日本に存在することで、アジア太平洋地域の安定を保つということを示している。これに合わせて、ガイドラインを見直すことになった。

そして、アメリカと日本の外務省や防衛庁の担当者が1年半近くかけて見直した結果、新ガイドラインには、「日本周辺地域における事態で日本の平和と安全に重要な影響を与える場合(周辺事態)の協力」がたくさんもりこまれた。つまり、日本そのものが攻撃を受けなくとも、日本の「周辺地域」で紛争事件が起これば、米軍を支援することになる。

4. 周辺事態が起こったら

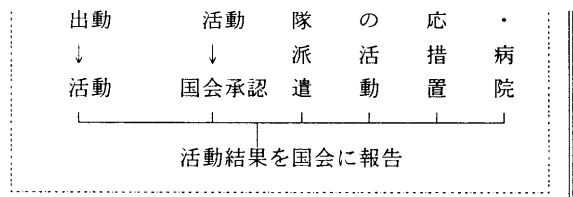
では、実際に「周辺事態」が発生したらどのような問題が起こるのか、ここで予想してみよう。まず在外の大使館が情報収集し、首相が判断や協力内容を詰める。基本計画を閣議決定し、国会に報告、国会へは原則的に「事前承認」とし、緊急時の場合は「事後承認」となる。そして、基本計画に沿って自衛隊は米軍に後方支援(物資の輸送、非戦闘員の救出など)を行う。さらに、民間の空港や港を米軍が使用できるようにし、民間の医療機関も支援することになっている。

これらには問題がありすぎる。むしろ間違っていないだろうか。国への報告は原則と緊急時とは全く違う。防衛庁筋では「ほとんどの場合が緊急時の場合の『事後承認』となる」と見ている。これでは、米軍と自衛隊の暴走につながりはしないだろうか。自衛隊の支援というのも、敵から見れば敵の味方、つまり敵である。ということは、自衛隊も攻撃対象になりかねないのだ。そうなると、自衛隊も武力を行使することになるだろう。これは明らかに憲法違反である。また、協力を求められた地方自治体首長は、正当な理由があれば拒否することができるが、「法的に期待される」となっており、また首長の指示を職員が拒否した場合、別の法律(地方公務員法など)によって処罰対象となる可能性があるのだ。つまり、国民は強制的に米軍を支援することになるのだ。



5. これが「周辺事態」!

「周辺事態」という言葉の定義は、「そのまま放置すればわが国に対する直接の武力攻撃に至るおそれのある事態等」となっている。では、「周辺事態」の「周辺」とはどこまでが範囲か。政府は特定の地域を考えているわけではないと繰り返し、範囲は決めないことにしている。しかし、このような不明確なものでは近隣諸国の反発を招く。事実、台湾問題のアメリカ介入を恐れる中国政府は、「安保範囲の拡大」と批判している。



6. 世論の反応は?

ニュースステーションの電話世論調査(4/17)によると、この法律に関心のある人は全体の約半数で半分の人には関心がないことがわかる。また、ガイドライン法を支持しない人は48%にものぼり、支持する人を上回った。支持しない理由は、アメリカの軍事介入に協力すべきではない、自治体・民間の協力が際限なく求められる、協力内容があいまいなどと、法のあいまいさへの不信感が根強く、憲法に違反する恐れがあると思う人も53%と半数を上回っている。

7. まとめ

日米新ガイドラインの制定により、自衛隊のあり方や日本と米軍の関わり方が新しい局面を迎えていることは確かだ。しかし、この法律には解決すべき問題がある。これらを解決し、日米安保体制を維持するには、憲法改正も考えに入れなければならないだろう。

<参考資料> ジュニア朝日年鑑 朝日新聞 防衛庁ホームページ テレビ朝日ホームページ

この論文と発表に対する生徒の評価は、

- ・もくじが簡潔で内容もわかりやすかった
- ・効果的な表の使い方が良かった
- ・発表の態度が良かった

など、他班の評価が高かった。

この論文と発表の内容を教師が評価すると、

- ・出典の引用部分が明記されていないため、自分の意見なのか、他人の意見なのか区別できない。
- ・日米安保体制の是非についての基本的な立場がはっきりしていない。
- ・「じれったい自衛隊」という題目は、内容にどのように対応しているのか、が不明瞭である。

などの問題があるが、

- ・日米関係の歴史的経緯の中での安保体制と自衛隊のあり方をコンパクトに正しく記述していること
 - ・国民の反応に関する部分は、現在の日本の国際的政治意識を客観的に評価したものとなっている
- など、評価できる点も多い。

今回の発表の際には、全体に対して、論文の作成にあたって苦労したこと、評価できる点など(自己評価)を口頭で述べるように指示したが、時間の都合上、十分な自己評価ができていないといえなかった。自己評価の視点を明確にすべきであったと思う。

4. おわりに

目標の設定・情報の収集・執筆・発表の過程の中で、全体と班ごとの指導を通じて、やっと何とか形になるものを残せる班もあったが、今回の実践を通じて、生徒はおおむね、研究に対して前向きに取り組んだように思う。

一方、生徒と教師のどちらにもいえることだが、理想

と現実のギャップを、改めて感じることもあった。生徒は、自分自身の情報収集能力と処理能力、表現力のなさを、教師は、カリキュラムにおける問題を痛感することになった。このことは、情報化社会の中で情報に流される受け身の姿勢ではなく、自分の意見をどのように形成し、表現するかという積極的な姿勢を持つことの難しさの再認識ともなった。

今後の研究において、限られた時間内での研究を通じて、課題に対する生徒の意識がどのように変わったか、どのような能力が育成されたか、を客観的に示すことかできる、また、生徒の意識と能力にあったカリキュラム構成と、評価の方法についての研究が重要である。